

會



報

昭和17年2月

114

日本山岳會

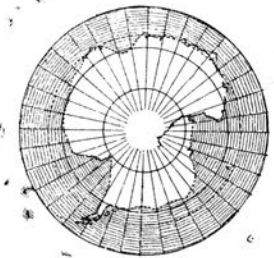
不退轉の決意ともいられるが、また暴虎馮河の勇といふこともある。進むを知つて退くを知らずといふのは成功した場合にはほめ言葉であるけれども、さうでない時は有難くない評言となる。一方の條件が壓倒的ならば、ことは簡單である。しかし客觀的にはさうであつても渦中の人物となるとなかなか截然たる見通しがつきかねるのが多分の場合である。部隊長のこの決心が、もとより戦の勝敗の岐るゝところであるが、登山や探検では、その帯びてあるところの使命や企畫性が、戦陣ほどに急迫的でないのが普通であるから條件の幅が廣くなり、従つてまた判断の餘地が多くて、意見がいく節も立てられることとなる。日歸りの山登りであつても、また遠い冬山にしても、途中で目的を放棄して歸るやうな場合、技術書に示された純理論だけでは決して決しきれぬ事情の添加されがちなのは誰でもが経験するところである。優秀な隊長とは、かういふ時、狐疑に陥らず即断に走らずに善處する人であるが座して思ふと吹雪にたゞかれて考へるとはなかく、同じには行かない。

シヤツクルトンが力とたのんだ滿洲矮馬につき、と死なれて八四度からは人力曳行の穩行進を一七日もつゞけ、南極地點から一八〇キロのところまで追つてゐながら、撤收を取つたあの決意に敬意を感じない人はいないであらう。人曳き橇のおそい速度と残された食糧とこれから南極へ行き全行程を歸還する距離とから計算によつてそんなことはすぐに定められることであるといへるが、何しろ目の前に、有史以來の榮冠がぶら下つてゐるのである。シヤツクルトンがこのときなほ前進を企てゝゐたら、或はスコットと同じ運命になつてゐたかも知れないのである。



前か進
退か却

加納一郎



知れないのである。

一九世紀のはじめの頃、イギリスは北西航路の探求に力こぶを入れた。ジョン・ロスはこの頃、一隊を率ゐてバフィン湾を北上してランカスター海峡に入つて行つたが、白雪の連嶺の前方に展開するのを望見して、左右の陸岸が先へ行つて一つに續いてゐるものと断定して、船首をめぐらして歸つて来た。これはちやうどシヤツクルトンの場合とは反對の側で、その時の部下だつたエドワード・パーリーは、ロスと見解を異にし前進の好望を信じてゐた。それで翌年彼はヘルカ號に長となつてこの海峡を西方へ航進してつひに前年のロスの判断の早計であつたことを實證し、バロー海峡からメルヴィール海峡にまですみ、當時イギリス政府が西經一〇〇を越えたものに對して懸けてゐた賞金五千ポンドを得たのである。

パーリーはこの時、年いまだ三十を出てゐなかつたが、すでに優秀なネヴィゲーターとして北西航路に横ばる主なる島嶼のほとんどもを發見し命名したばかりでなく、探検隊長として組織と統卒の才にたけ、そのヤリ口は大膽と細心の完全な結合であつた。彼はそれから引つゞいて三回にわたつて北極海に入り、英海軍の探検隊として

最初の内陸踏査隊を出したり、越冬の方法に新機軸をあらはしたりして席の暖まる暇がなかつた。	1
こゝに面白いことはパーリーの指導者であつたジョン・ロスの甥にあたるゼームス・ロスがこの三回の北方航海にいつも参加してゐたことである。ゼームス・ロスが叔父に伴はれて初めて北極洋の洗禮をうけたのは十二のときであつたが、叔父の失敗にもかゝらず、彼はなほパーリーについて熱心に修業して、つひには氷海の航海者として古今を通じての第一人者といはれるまでになつた。彼の第五回目の北西航路探検では、叔父はまた海峡を灣と誤認してたうとう成功を逸してしまつたが、ゼームスはその代りに北磁極の位置を確定して不朽の名をとゞめた。また四冬季間つゞげて極圏内に越冬し	2
目次	3
前進か？ 退却か？	4
山のスケッチ要領十則	5
山の匂	6
猫鳴山と吃兎屋山	
ピーク・ホン・ケルンヂ(上)	
山の思ひ出	
會員の聲・會務報告	

好成績を残した。

しかしゼームス・ロスの極地探検家としての名聲はむしろ南極圏においてより高い。彼は一八三九年イギリスを出帆して四三年に歸國するまで南極大陸沿岸に向つて三回の大航海をなし、殆んど何も判つてゐなかつたこの海域の状況を著しく明らかにした。彼の野心は地球の兩極地方においてその磁極の中心を發見して祖國の旗を立てようといふのであつたが、南磁極は海水にさまたげられて容易に近づくことができずこの功名を逸したが、そのためにエンブス(四〇三メートル)テラー(三二七六メートル)の兩火山を發見したのを手はじめに後年バードやアムンゼンの基地となつた有名なロス氷崖を發見し、また第二回の航海には南緯七八度一〇分まで船をすすめた。この高緯度記録は實に前述のシヤツクルトンの探検まで五八年間も保持せられたのであつて、如何に運がよかつたとはいつても、彼の抜群の技量を認めなければならぬ。極地探検において一つの記録がこのやうに長い間もち續けられたことは南にしても北にしても非常にめづらしいのである。その頃の探検家、航海者は、かうした群氷域に遭會した場合ばかり

その邊端にそつて航海したにすぎなかつたのに、ロスはこの氷海へ敢て侵入して行つた。それが十分に乗り越え得られる程度のものかどうかは一に經驗によることであるが、ロスの決断は間もなく良果をもつて報ひられ無氷の海邊に出てアデル岬を南に回航し、今日のロス海を命名した。このあたりの航海は現時の力による船でも慣

山のスケッチ

要領十則

榎谷 徹藏

- 一、面倒臭さがらぬこと。
- 二、要領のみを簡單に描け。
- 三、重點は一つだけ。
- 四、光線のフに注意せよ。
- 五、明暗の度、色彩の變化で焦點を生かせ。

關西支部研究會、榎谷徹藏氏の話より抄録(文責編輯者)

重に慎重を期せられるのに、エンプス、テラーの二艦は重構造であつたといへ、木造の帆走船だつたことを思はねばならない。ロスは南極から歸るや一先づ退いてこの二艦をフランクリンに引ついで。ジョン・フランクリンは全英國興望を負つて北西航路を完航すべく壯圖に上つたが全員百三十名が、凝寒朔北の氷野に凍傷に仆れ

て探検史上空前の慘事を出した。もつともこの遭難のために多數の搜索隊救援隊がくり出されて却つて極地の事情の開明が著しく促進されることゝなつた。そしてロスもまた再び起つて、かつて南氷洋上に艱苦なとにしたこの友の救助に従つたが無爲に終つた。以上シヤツクルトンの果斷、パリーの先見、ロスの敢進をとつ

て見たのであるが、もと／＼これら一流の探検家といへども、いつもかくのごとく鮮かな進退ばかりをしてみただけでないことはいふまでもなからう。極地探検の歴史は人類の文化史として見れば赫々たる功名の集成であるが、探検家の個々についていへば、むしろ失敗の連続であるともいへれる。アムンゼンのごとく兩極地に達したや

うな人物でも、二十歳時代のスキー登山の遭難からイタリヤ號救援飛行で落命するまで、その生涯は失敗にはじまり失敗に終つたといへるのである。

さてこゝで考へたいことは、ジョン・ロスからパリーへ、パリーからゼームス・ロスへ、ロスからフランクリンへと極地探検のことが、言葉通りに次々とリレーされてゐることであつて、シヤツクルトンの場合でも、亦スコットと相連關してゐる。實にある目標に向つてのセネレーションを重ねるの努力がよくこゝに現れてゐると思ふ。氷海の航行といふ山とは反對の引例で恐縮であるが、ある一つの意味で貫かれた探検の遂行、繼承者の養成については山も極地も變りはないであらう。かやうなことは學校山岳部などで小規模にこれまで見られたこともあるが、國をあげての一貫性にまで進むことが望ましい。勿論、遠征とか探検とかは國情や時局を外にして在りえずおのづから盛衰を來すことは當然で、目下の狀態で白瀬隊の後續者を求め、立教大學隊を傳承するものを性急に作らねばならぬとするのは間違つてゐる。しかしそれかといつてこれを全く放棄し去つて、もと／＼發生の異つたものへ走つてしまつては後に悔いる日が必ず來るであらう。

山の句

安成 山魯

- 昭和16年10月31日夜發
岳友小林誠一郎、篠原眞男兩兄と燕、常念縱走行
- 中房途上二句
檀の實霧にたゆたふ紫に
朱實割れて澤一杯のつるもとき
- 中房温泉にて
新雪の山何々ぞ十三夜
- 燕途上三句
新雪の槍の夜明けを鶯舞へり
岩かゞみの厚葉紅葉す山は雪
見つめゐて險凍たり槍の雪
- 大天井三句
ピツケルの埋もるゝ雪の深さかな
外上げの風をまよもの槍ヶ岳
大天井よぞ越え來し雪はだら
- 註、外上げは越中側より吹く風をいふ
- 東天井にて暮る
外上げの月吹きならす寒さかな
凍岩に突くピツケルや火を發す
地圖見るや山は雪明り月明り
雪に漬けて水砂糖のうまさかな

猫鳴山と 吃兎屋山

行方沼東



阿武隈山脈は最高點大瀧根より南延して萬太郎、矢大臣、羽山、鬼ヶ城等の諸峯を起してゐるが、それらの山と共に夏井川、木戸川の水源をなすものに、神樂山（八〇八M）吃兎屋山（八七五M）猫鳴山（八二七M）等何れも八〇〇M以上の標高をもつ準平原の一群がある。

一月四日の夕常磐線四ツ倉驛に下車して凡そ六キロ玉山鑛泉の玉屋に宿る。湯は沸し湯だがアルカリ性のつる／＼した感觸は決して悪いものではなかつた。二百年も前から續いてゐて胃腸病に特効があるとは宿の主人の話であつた。翌る五日早朝出發と豫定したが、豫定に反して宿を出たのが午前七時四十五分、あまり早い方ではない。二日の日に降つたといふ雪が日蔭に凍てついてゐる一本道を菫蒲平へと指す。兩側は赤松、檜、桐等の林、所々に杉の殖林もある。その澤のさゝやかな溪流に沿

つて登るともない程の登りであつた。やがて小さい峠の上に立つと郡界の三ツ森（六五六M）の一端が見えた。この奥に八葦、松山の銅山が盛であつた頃菫蒲平に數軒の家があつたらしいが、今は僅かにその面影を止むのみだ。白々と輝く河原を見下し乍ら平へ下つて流れを渡り又もだら／＼と登つてゆく。道のわきに樺の大木がたつた一本残つてゐたりマニミの老木が數本枝一杯に小さな赤い實をつけてゐたりした。鑛泉からこの邊までの路傍で、ヲサシダ、クマワラビ、ツナナシキノデ、ジュウモンジシダ、マメヅタ、オホバノエノモトサウ、ヘビノゴザ、イタチシダ、トラノチシダ、イハガネゼンマイ、ワラビ等の羊齒類を見た。地圖の三八一Mの峠に着く。こゝに石神の小祠が祭られ餅が供へてあつた。峠を下れば片倉、今では銅山は中止されてセメント會社が石灰岩を採掘し鑛泉ま

での間を索道によつて運搬してゐる。その關係の人達の住家が十數軒建ち並び小さい國民學校やお湯屋等もある。この部落をぬけて郡界の尾根に向ふ。三ツ森の全貌が右正面に見える。こゝの道はたにも山櫻の老木が一本残されてゐた。松山鑛山への分れ道の一寸先きで水量豊かな美しい溪流を渉る。その支流に沿つて若い潤葉樹林の中を登る。清冽な水は靜かに明るい林間を迂曲し暫らくの間は實によい閑寂境をなしてゐた。この林間でミヤマクマワラビ、ヤマヤブソテツ、シ、ガシラを見た。間もなく雙葉、石城の郡界に出た。残雪が可成り多い四九八Mの獨立標高點と平營林省の指導標とが建つてゐた。郡界を左に猫鳴の尾根に取り付き雪の中を登る。どこまでも雜木林である。暫らくして平らかな草付に出た三ツ森が下になり大平洋をばる／＼と見晴す。鹽屋峠が黒く海に突き出てゐるの見える。東北に當つては五社山（六八五M）がどつしりした姿を見せた。この草場は中ノ平と呼ぶそうだ。

洋上を遠望して大皇軍の必勝完遂を山の神に祈願し、はるかに無限の感謝を捧げた。中の平のすぐ上の突起の南側をまいてゆく。残雪いよ／＼深い。猫鳴から二ツ箭山（七一三M）に連互する七七三Mの大きな尾根が左の林間に長く横たわつてゐる。猫鳴山は南北二つの突起を持ち南の方が稍高い。頂上は赤松、ナラ、クマキに交つてツ、シ其他の灌木が密生し眺望もなしい樹枝の上から僅かに西北の吃兎屋を見ることが出来た。雪は三〇センチ位あるので踏跡は全くわからず地圖上の小徑を確め得なかつたので東側からツ、ジの間をくゞつて直登した。頂上から北に下ると廣い平に出た。その平の中央には長い土手が築いてあつた。思ふにこれは郡界らしい。空は曇つて吹きつける寒風烈しく、時折雪しぐれが降つてきたので平の下にある炭焼小屋を訪れて、暖をとり午の食事を濟せた。時に午前十一時五〇分、再び前の平に登り郡界線を傳つて西北側の小突起の上に出た。風が非常に冷たく、顔は引き千切られる思であつた。郡界の土手から左にきれて林中を下ると、そこは廣々とした伐採跡で敷屋澤の頭をなしてゐる所であつた。正面に近く吃兎屋の二の峯がはつきりと見える。敷屋澤は明るく廣い澤であつた。そこには炭や薪を下す棧道が長く續いてゐた。吃兎屋の途中まで行つて棧道を下る。炭焼釜が處々にあつた。一氣に下ると樺の巨木が數本立つところに二

三軒の家がありそこらの道幅はトラックを通ずる大道となつてゐた。二ツ箭山の岩峯が左に見え始めた間もなく芋島につく。左に登つて行くのが十文字道。淋しい家が二三軒と木炭倉庫とがあり中に住む人もなく荒れ果てたのもあつた。道の分れ目に右シクヤ山道左十文字を経て戸渡に至るの指導標があつた。嶺下ると横川の村で横川橋を渡る。田甫があり果物畑があり竹林があり水車がコトリ／＼と廻つてゐた。美事な大杉の鎮守の前を通り廣い高原となる。水石山、關御井岳がおそろしく扁平に夕空を限つてゐる。

オハヤシといふ休み場が高原の突端にあつた。夏井川の流域一帯が眼の下に展開しそち／＼に固つてゐる村々も指呼される。オハヤシを下つてから四十五分で小川郷の驛に着いた。吃兎屋山へは小川郷に下車して横川、芋島を経て敷屋澤に入るか十文字に登るか何れでもよい猫鳴山へは今度の行の迹に吃兎屋側から行く方がよい。又どの阿武隈の山もさうであるが冬の間よりもツ、ジの咲く頃か或は紅葉の盛りに登るのが一番よいと思ふ。

（地圖・五萬分一、川前、平）

イク・ホン・ケルンチ (上)

アルベルト・フレイ 福井幸男 譯



イク・ホン・ケルンチはスマトラ島一の高山で、東印度諸島第一の火山である。

ケルンチはエトナ火山と同じ大きさで、南北の底面の直径は約三十軒で、他の山脈に挟まれた圓錐形である。

航海者に取つては、海岸の港町の名を取つて、ビイク・ホン・インドラホーラと呼ばれてゐる。ケルンチ火山の登攀は、困難な事でない。併し登山には、原始林通過を覺悟しなくてはならないし、露營も數回しなくてはならない。以前の他の困難さ、就中一八七八年の中部スマトラ探検の際、此の山の初登攀の時の困難さは言語に絶した。其の際ケルンチ高原一帯はオランダの統治以外であつた。登山路は南のケルンチだけでなく、北から即ちホルト・デ・ニツクから到

着出来るローホー・ゲダンからも導いてゐる。其の海拔は四四〇米其處から原始林の中を通過した探検隊は三三六〇米の高度差に打ち勝つたのである。日数は五ヶ月もかゝつた。山頂自身も、處女登攀の時、極めるのに七日も費やされた。此の後、この火山北側は、就中その北麓のコーヒー栽培地に働いてゐる土人によつて、度々登山されてゐる。

この山脈一帯の最初の測量（一八九三—一八九七）は北部から取りかゝり、火山の最高點は、最初海拔三八〇五米とされた。併し後代噴火で五米許低くなつた。最高點は火口の鋭い隆起、通稱ペラピイ山に移動したのである。又火山の南麓の方面は一九二四年に、測量された。ケルンチ峡谷の上部では、土人が茶の栽培を行つてゐる。此等は海拔一五〇〇米から最大限二三三〇米の地點まで行つてゐる。もう精一杯限度であらう。測量事業は、縮尺十萬分の一の地圖を製作するばかりでなく、後の萬一の噴火の際、山の形態の變化を確めるために、一萬分の一の地圖に、此の活火山を収めたのである。

易になつた。人は歩かなくて海拔一五〇〇米の地點まで、自動車で達し、僅か二日で登れる。若し海拔一七五〇米にまで進められた開墾地が、二三〇〇米まで、原始林保存區域の處に達したとすると、一日で頂上を究め得る。其の可能性は今後十年間は近づき難いのである。其にも係はず、ビイク・ホン・ケルンチへの登山路は失はれない。そして濕めつた暗黒の原始林の中での登攀と露營とは一つの樂しみの如く人々に思はれる。其上、比較出来ない程の眺望を持つたドライブを海岸のバーダンからターバンまで樂める。鑽の様に、印度洋の海岸から續くこのロマナンツクな山道は、パアリスン山脈を越へて、ケルンチ峡谷の中を導いて行くのである。此のドライブが道路の高度差が殆んど零から一四〇〇米の地點に登る故、又原始林を續けて通過する故に、植物分布地域上沿道は興味ある對象となり、就中ヒマラヤ松屬 *Pinus Mercusii* の南部の標準的の松があるので有名である。此の松を、スマトラ島の内部で發見した植物學者 *Jungbluth* の驚異はなほ現代でも、銀松と想像し難い程接近して此の松を見る人の心に生じるらしい。北スマトラの峻険な峡谷に於て、大部分枯れてしま

つて、スマトラが土地として隔合してゐた、地質時代の遺物として考慮されてゐる此の珍らしい *Pinus* 種の森林を發見して以來、此の理論の決算として、スマトラ山中の *Pinus Mercusii* の發見地は、地質學上價值あるものだ。パアリスン山脈の中の此の道路は、相當に険しく、ビイク・ホン・ケルンチの後で、即ちやゝ大きい水面の海拔七八三米の田園的の湖ゾエンカイ・ベエノーで終つてゐる。此の道路でのドライブは、一曲り／＼森を通り抜けては遠くに林や稻田を見、又雲の様に過ぎ去つて行くケルンチ高原の美しい風景を樂しめる。最初に大きな峡谷の入口が深い印象を與へた。溪流には、岩や石を越へて水が泡立ち、岸に野牛の如く衝突する。又氾濫しても襲かされない様な高い長く延びた

臺地には、青々とした稻田がある。村々には大きな木造の倉庫があり、人々が働いてゐるのも見える。
住民は *Meungkahau-Mungien* 族で純マレイ族と幾分か混血してゐる。美しい彫刻のある木造の家々を人々は東部地方のバーダンゲルの如く *Meungkahau* 人の文化の産物であると明らかに知る。背中の大きな籠で荷物を運んで行くのは彼等が好む習慣らしい。
海岸マレイ族 *Batak* 族では、頭で荷を運んでゐるのである。鼻で働いてゐる女たちも、小さな荷物を背中につけてゐるのも面白い。
峡谷一杯に擴がった青空！その遠い彼方に雄大なビイク・ホン・ケルンチが全山を壓してゐる、何と素晴らしい気分だらう！（つゞく）

山日記

送料共一圓三十錢

高山深谷

定額 七圓五十錢
送料 三十錢

◆残部僅少となりました。御入用の方は至急御申込下さい。
◆本書は非常な好評で、發賣早々書店では賣切れたやうです。然し本會には尙少々ストックがありますから御買洩れの方は御申込下さい。

山の思ひ出

武田久吉

(日山岳社團法入)
(改組關西記念講演會)



「今から約五十年前頃は箱根山へ日歸りで行くといい

ば皆驚いたもので、よく歩けた私が初めて箱根へ行つたのは確か小學生以前の事と思ふ。當時は人力車で湯元迄行きそれから山駕で登つたものである。當時の山の宿がどんなものであつたかは全くお話にならないのだが今でも越後苗場山麓の赤湯温泉へ行くとき當時の山宿を思はせるまゝの旅館が残つてゐる。それがどんなものかといへば室に畳が敷いてなく又掃除もしない。布団寝具も何十年間乾しもしせず洗ひもしないといふ有様である。だから山へ行くといへば猛獣毒蛇が出るのとよく引止められた。小學校上級になつた頃榛名、妙義へ出かけたのであるが當時はどうして行くのかよく解らない儘出かけた。日本鐵道株式會社(今の國鐵)で高崎迄行つてそこで又新しく切符を買つて乗換へるといふ不便さ。碓氷峠では本當のゴマ

の蠶にも出會つた。そうした時代に何故山へ行く氣になつたか?先輩たる信仰登山家の影響多く趣味の植物採集したこともあり又雜誌書物に散見された紀行文により山の風物、面白さを知らされたからであつた。どんな本かといへば私は野崎右近氏の著書、各地の名所圖繪、それに理科の本に出てゐた高山に登つての植物採集記などといったやうなものであり、殊に三好先生の中學植物學研究上下二卷等で大ひに刺戟されたものである。小島鳥水氏は志賀重昂氏の日本風景論によつて興趣を深められた由である。

信仰登山家は我々の先蹤者であつて當時の我々には全く他で得られない智識を與へられたのであるがそれに就いて役の行者の事を考へるのである。東國では月山、羽黒山、鳥海山に屯してゐた。彼等は幼時より佛法の遊びをし山へ登るのも樂しみでするのでなく難行苦行して自ら神通力を得、それによつて天下國家の爲め邪惡を降伏せんと目的を持つてゐたのであつて天智天皇時代に役の行者が如何によく活躍したかは歴史に残つてゐる。現在は絶えてしまつたが修験道の山伏として残つてゐる。羽黒山の行者が非常な權力を持つてゐて私自身その紹介狀一つで他

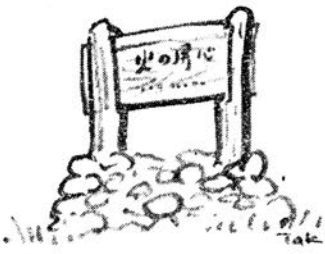
の山々で實に驚く程優遇されたものがある。平安朝時代に至ると相當多くの富士登山者が現れて來た。又御岳、白山、立山にも可なり山巧者が登り何れも我々の先蹤者となつたわけである。明治以後になつて行はれた科學的探險、植物採集の人々の業績が耳に入り目にもつたが却つてその方面の知識は入り難かつた。白衣の信仰登山家が幅を利かした時代で御岳等は正時代迄そうであつたと思ふ。斯うした空氣の中で我々の登山が育まれて行つたのであるが明治三十一年八月初めて日光へ行つた。之が私の山らしい山へ登つた最初のものである。明治三十年頃中學で日本博物學同志會を組織し回覽雜誌を出し次第に高い山へ入つて採集したり地理を調べたりしつゝ氣分を味はひつゝあつた。そして天と地の伸介者たる山神を尊敬し山に於ては心身を淨めるべきであると考へた。

その頃博文館から出してゐた少年世界の主催の登山會が行はれたりして出かけたものだ。雜誌に出てゐる紀行文もその多くは「戸隠山探險」といつた式のもので登山中に猿が出て來てそれを打ち取つた……といふやうなお話めいたものだつた。明治三十六年頃かと思ふ。その頃小島鳥水氏の山岳紀行文が文學雜誌「文庫」によく出てゐたが「太陽」に出された「白根の北岳」なる記事を読みその綿密な觀察と敘述、しかも地圖の誤謬さへ指摘されてゐるのなみて實に驚嘆し畏敬の念を禁じ得なかつた。そこで當時横濱に在つて博物同志會支部幹事をしてゐた高野鷹藏氏を煩はし小島氏に會ひに行つたのであるが忽ちにしてお互ひが百年の知友の如く談し合ふといふ始末であつた。之は三十七年の秋だつたやうに憶えてゐる。又一方越後に在つた高頭式氏といふ非常な讀書家であり落書家でもあつた人が自ら纏められた「日本山嶽史」といふ書物の校閲を小島氏に頼まべく送つて來られたのであるが、この本は日本中の山を國別にし高さを記し距離を明らかにし文獻を掲げ又地質を表にしてある。等々と實に大したものであつて我々同志も之は、仲間だ捨て、おけねと早速文通を始めた。又ウエストンが横濱で牧師としてゐて「日本アルプス」を著してゐたのがこの有名な書物の事は三十五六年頃から承聞してゐたがその本人が横濱に住居を構へてゐると知つた小島氏は早速會見する事になり愈々山好きな連中の會合が次第に始まるやうになつた。今一人本會創立當時の重要な人物として數數馬

氏を挙げねばならない。氏は明治三十四年頃から東京の植物を樂しむグループを集め山草會を作つて居り氏はその中心の人物であつた。この人は辨護士であり日光の五百木文齋伯とも懇意だつたりして社會的地位もあり可なり前から山野に親しんでゐた人である。この山草會がその例會を會員だけでなく一般にも公開しやうと園子坂の蕪風園で高山植物の陳列會を開いたのであるが(三十五年五月頃)之が非常な好評を博し毎年開く事になり次第に熱が上つて遂に毎月松平子爵邸で山草會例會を催すといふ有様だつた。この會には實に多種類の仕事を持つた人々が集まつてゐたのであるが唯高山植物を樂しむといふ事によつて強く結ばれてゐた。この例會には牧野富太郎博士も鑑定に見えたりしたが博士も御存知ない高山植物が出てくるのでその場々で名をつけられたといふ事もあつた。その連中も段々と慾が出て來て遂に自ら高山へ出かけて採集したいといふ事になつて我々と相寄るやうになつた。其處へ長野の河野齡藏氏(この人は縣下の山は我々の手で……と熱をあげてゐた人)が戸隠、白馬、八ヶ岳へ登りお花畑一面の高山植物に陶醉した記事を雜誌に出したりしたので城氏らもじつと

して居られず早速三十五年には八ヶ岳へ出かけた。そして八ヶ岳本深温泉を根據とするのが一番よいと聞いた私も亦翌年同志會の者と二人で途中カタ馬車にゆられたりして三日目に赤岳頂上迄登った。臺灣とヒマラヤにのみあるといはれるシダを發見タカネシダと名づけたのもこの時であつた。この結果駒ヶ岳へも登りたくなつたがどこから登つてよいのが判らない。當時の地圖は全く不備なもので山のある筈の處に山なく谷の記號の地點に山があつたりして當時の人々をして面喰らばせたものだつた。が翌三十六年には八ヶ岳、駒ヶ岳へ、三十七年には戸隠山、三十八年には四月より十月末にかけて十ヶ國の山に登つた。大宮口から富士山にも登つた。鹽尻峠から見ると本アルプスの大觀に驚異の目を瞠り穂高の岩場を遠望して大雪と思つた等の滑稽もあつた。その年の秋頃になつて何か纏つたものにしたといふ意見が集つてこゝに山岳會を創立するといふ事になつたのである。がさて愈々とりかゝらうとして一體全國に幾人の登山家があるだらうか、雑誌を幾ら刷ればよいのか等といふ肝心な事で一寸困つたのであつたが愈小島、高頭、城、高野、山川、私等が發起人となつて翌三十九年四月五日日本

會を創めた次第である。その他種々な話したい事もあるが時間もないのでこれ位にしておきますが尙一言最近の登山界の問題について私見をのべておきたい。それは最近登山の新體制とか新登山道とかよく言はれてゐるが登山の根本精神はそう易々動搖するものではない。單に山へ登つてくるといふ事だけでなく山へ入つて山から何か精神的なものを掴んでくる、或いは學んで歸るといふのでなければならぬ。皮相的な登山は避けなければならないし又獎勵すべきでない事は斯かる時代なればこそ尙一層必要なのでないだらうかと思ふ。以上約二時間に渉り其うした機會でなければ何へないお話を願へた事は我々本會に深い關心を有する者にとつて誠に有難い事であつた。時間の不足を惜しみつゝ九時半盛會裡に閉會す。(富田記)



講演と映画の會報告

十一月二十九日夜九段軍人會館で催した講演と映画の會は豫告通り開催、多數の參會者を得て盛會裡に終了した。其後間もなく大東亞戰が勃發したので、かれこれするうちにこの會の内容を報告する機を失してしまつたので此處では單に會計報告する事に止めて置きたいと思ふ。講演をして下さつた田中薫氏、英木猪之吉氏、映畫富士山を貸與された國際觀光局、又切符賣捌の爲に人知れぬ苦勞を願つた會員各位に此處に改めて厚く御禮申上げたい。

會計報告

收入	四八七・六〇 切符賣上總額
内 譯	一四九・六〇 店賣等二割引切符
	三七四枚分
	三三八・〇〇 會員賣捌六七六枚分
	四七・二〇 集會費トシテ本會々計ヨリ支出
計五三三・八〇	
支出	一五〇・〇〇 講堂使用料
	四三〇・〇〇 講堂内器具使用料
	一五七・〇〇 印刷物費用
	七〇〇・〇〇 講師謝禮
	一二・八〇 當日食券代
	六〇〇・〇〇 映畫借賃
	四二〇・〇〇 入場税
計五三三・八〇	
差引ナシ	



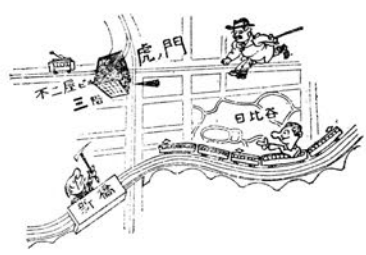
會員の聲

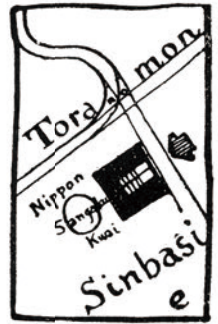
呵々誌

木藤精一郎

〇呵々誌は案山子を振ちる。そして滑稽な案山子に代つた所感を記して見た。
 〇近頃、登山界の先覺者を氣取つたものの中に、旺んに登山精神といふ文句が叫ばれてゐる。そしてこの登山精神といふのが、千數百年大昔の役行者の精神であるとか、現在の軍人精神であるとかいつてゐる。しかし精神なるものは、行爲に現はれ出でないと、果してそれがあつたのかないのか判らない。
 〇教育勸語の遵奉すら完全に出來ないわれわれに、殊更に難かしい精神を捏ちあげて、それを信仰させるよりも、われわれは、自己本位の、自由主義的行動や、安價な見榮、獨善的な滑稽な誇示などを敬めて、たゞ黙々として實行して

ある方が、却つて登山精神なるものを認識し、また昂揚するものではないかとおもつてゐる。
 〇政治なくして一般生活は出來ないだらうか、登山には、まだ、政治屋のする政治などなくとも差支ないばかりか、この式の政治家が多くなればなるほど、登山界は煩雜になり、また墮落して行く。これは現在の事實である。
 〇登山界にも勿論先輩がある。勉強や仕事の合間に、時偶、氣まぐれに山に登つたのが、比較的古いといふので、先輩として仰がれ、また自ら先輩だと、氣取つてゐる式の先輩がある。しかし、失禮ながら、この先輩の経験や研究が、無力であり、貧弱であり、拙劣であつたならば、後輩を導くなどはおろかなこと却つて後輩を害毒する。





會務報告

◎一月常務役員會

1月22日18時事務所ニテ開催。

出席者—木暮、鳥山、茨木、沼井、藤島、中司、木村、早川、吉澤、逸見、山口、塚本、吉阪、

委任—交野、中原、富田、福島、議題（議長—木暮理事）

一、日本山岳會賞候補者検討ノ件
一、新年度及役員幹事補充候補者検討ノ件。

一、高山深谷出版記念展覽會開催ノ件。（會員大山氏、交野幹事ノ努力ニヨリ1月25日カラ30日マデ銀座三越ニテ開催）
一、入會申込者詮衡 13名承認

終身會員ニ變更

八木橋豊吉（會員番號九三九番 大正四年六月入會）
右昭和十六年度ヨリ終身會員ニ變更

圖書受贈

住友山岳會編
近畿の山と谷
右住友山岳會

會員章再貸與

小關芳三（一六四七番）會員章紛失
ニ付キ二二二一番ヲ再貸與ス

圖書基金受入

一口金五圓也 細川景正氏より
一口金五圓也 田邊主計氏より

關西支部 十二月役員會

昭和十六年十二月八日 於ルーム
出席者—富田、大藤、西岡、栗飯原、外委任

1. 關西會員大會通知狀發送済みなるも本期の日米開戦により各方面の障害が考へられるので出席決定の横副會長と打合せの上開否を決定し速刻通知の事とす（係富田）
2. 會員大會當日の事務分擔決定現下登山界の動向に對する本會の方針宣明の件、富田より説明、審議の結果、その方法時期につき本部と協議することとす。
4. 會報關西欄は現在原稿は集りつゝあるも編輯上種々の難點あり一度廢止と決定す。

關西支部へ 圖書寄贈

1. 極地集誌 加納一郎著 右 加納一郎氏
2. 富士山 深田久彌編 峠 深田久彌編 右 青木 書店
4. 北大山岳部々報四、五、六號 右 北大山岳部
5. 尾瀬と日光 武田久吉編 高山の植物 武田久吉著 右 武田久吉氏
7. 民族研究會編 武庫川六甲山附近國碑傳説集 右 民俗研究會
8. 霧水園 袋 一平著 右 袋 一平氏

編輯後記

色々な束縛の生じたためでもあらうが、會員の活躍を物語る前進的な登山の記事が殆んど見られないのは止むを得ないにしても、單なる懐古に時を費してゐてはならない。過去の經驗も、歴史も現代に生かされて始めて意義があるのであつて、昔は酒も砂糖も豊かでないといつて見た所で益々今日の惨めさを感じるだけである。そこから一步出てこの惡條件を克服して行く意氣がなくては、十二月八日以後の日本人たるの資格はない。古人もさうした様に、直接行動

に移して實行するこゝの出來ない時は、退いて研究し、勉強し、己れを必しも登山遠征の下準備としての地誌的な調査や、準備、計畫の研究ばかりをいふのではない。山岳文學といひ、山岳畫といひ、その他の藝術面に於いても不斷の努力がはらはれねばならないのである。さうした隠れた地味な鍊成期間なしにさうして大東亞戰的な戦果が擧げられよう。會報の進むみちもそこに示されてゐる。長年極地の研究をしてゐられる加納氏、しだ類さ久しく取り組んで居られる行方氏、又新進としてスマトラを勉強された福井氏の記事を喜ぶ次第です。今後ますますこの紙上を通じて會員諸氏の努力の結果を發表されたい。

昭和17年2月28日 印刷納本
昭和17年3月6日 發行

頒價二〇錢

日本山岳會内

編輯者 吉 阪 隆 正

發行者 塚 本 繁 松

東京市芝區琴平町一(不二屋ビル)

發行所 法團 日本山岳會

電話芝(四三)一六四九

振替東京四八二九

印刷者 芝區今入町二十六番地

印刷所 株式會社 鈴木商店

オカモトヤ 印刷部

東京市神田區淡路町二丁目九番地
配給元 日本出版配給株式會社

塚本閻治著

日本の山々

初版賣切中の處、新裝再版完成！ 資材不足の折につき、再版を以つて絶版と致しますので御買洩の方は至急御注文下さい。

五圓(送二二錢)

二六〇二年版

山岳寫眞年鑑

大好評・初版賣切、再版完成！ 部數僅少につき大至急御注文下さい。

三圓八十錢(送一四錢)

中村 謙著 東京附近雪艇の旅

一圓六〇錢 (送一〇錢)

山と溪谷社編 新しきスキーの山旅

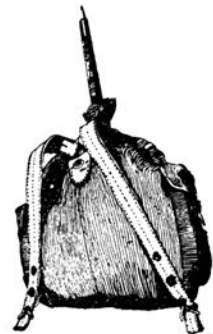
二 圓 (送一〇錢)

山と溪谷社編 登山講座

スキー・登山のことなら何んでも解る全六卷綜合講座愈々編輯開始！ 陽春發賣・乞御期待

東京市芝區 山と溪谷社 振替東京
田村町六ノ四 六〇二四九

麻防水布製



キスリング型(E式)

ルツクサツク

★品質優秀責任保證★

布地見本適呈

大型 二 尺 二七・六〇

中型 一尺八寸 二五・二〇

小型 一尺六寸五 二四・三六

☒テルモス各種ハイキング用品

右は物品税二割を加へた改正値段です

御諒承下さい

東京市神田區神保町三ノ一(専修大學電停前)

片桐テント登山具店

電話九段(四)三二一〇番
振替口座東京九一一八四番